

詩篇120－131篇 「都上りの歌」

1A 偽りの舌に囲まれた生活 120

2A 山に向ける目 121

3A エルサレムの平和 122

4A 憐れみを求める目 123

5A 味方なる主 124

6A 取り囲まれる主 125

7A シオン帰還の喜び 126

8A 主の建てられる家 127

9A 家族の祝福 128

10A シオンを憎む者 129

11A 深い淵にいるイスラエル 130

12A 深入りしない信仰 131

本文

詩篇 120 篇を開いてください、私たちは今日から「都上りの歌」を読んでいます。午前礼拝で説明したように、これは主への祭りを祝うためにユダヤ人がエルサレムに上っていく時の歌であります。巡礼の歌です。それは、ダビデが神の箱をオベデ・エドムの家から運び出し、エルサレムに運ぶ時のその時からあったものです。主を、この方の選ばれた場所で参拝する時のための歌であります。

モーセを通して主はイスラエルの民に、年に三度、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りを守るために、主の選ぶ場所で御前に出なければならぬと命じられました(申命 16:16)。ですから、これを守るために近くから、また遠くからユダヤ人がエルサレムに向かっていきます。そして、私たちは日本語で「上京する」という言葉があるように、都に向かうことを「上る」という言い回しをすることに慣れていきます。けれどもイスラエルでは、エルサレムがユダの山地にあるので、人々は文字通り上って行って都に向かいました。都に近づけば、それだけ主を礼拝する仲間に合流したことでしょう、それで気持ちも高揚していったに違いありません。

そしてこれは、新約聖書にも見ることのできる場面です。イエス様を生んだマリヤとヨセフが、エルサレムに幼子イエスを連れて行きました。過越の祭りの時、イエス様が十二歳の時に家族でナザレから都上りをしました。そして主が十字架に付けられる時も、都上りをしていたユダヤ人によって見られていました。そしてもちろん、五旬節の時は世界中からやってきたユダヤ人がいたので、弟子たちの異言で語る神への賛美を、それぞれの言語で理解することができたのです。

今、イスラエルに行き、エルサレムに向かうバスに乗れば、この高揚が少し感じ取ることができ
るでしょう。幹線道路をバスが走り、それは上り坂になっており、エルサレムに近づくと、石灰岩の
石で造られた建物によって、太陽光が反射して光って眩しい町が見えてきます。そして、オリーブ
山に回って、その頂上から神殿の丘を始めとするエルサレム旧市街を見るのは圧巻です。しかし、
主はご自身が地上に戻ってこられて、終わりの日にこの都上りを完成してくださる時を定めておら
れます。「ミカ 4:1-2 終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、
国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上
ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンか
らみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。」

そして、キリスト者にとってもこの望みは同じです。それは、私たちは神の聖所、すなわち天にお
いて、一堂に会する時が定まっているからです。「しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の
都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。(ヘブル 12:22)」
今、地上にあるエルサレムではなく、天から降りてくるエルサレムがあります。私たちは云わば、こ
の天の故郷にあこがれて、地上において旅人として生きている者たちです。そして、神の御霊によ
ってこの天の都の希望を堅く保っている、キリストの教会に集っているのです。

1A 偽りの舌に囲まれた生活 120

120 都上りの歌 120:1 苦しみのうちに、私が主に呼ばわると、主は私に答えられた。120:2 主よ。
私を偽りのくちびる、欺きの舌から、救い出してください。120:3 欺きの舌よ。おまえに何が与えら
れ、おまえに何が加えられるのか。120:4 勇士の鋭い矢、それに、えにしだの熱い炭火だ。120:5
ああ、哀れな私よ。メシエクに寄留し、ケダルの天幕で暮らすとは。120:6 私は、久しく、平和を憎
む者とともに住んでいた。120:7 私は平和を・・、私が話すと、彼らは戦いを望むのだ。

この詩篇は都上りの序幕と言えましょう。エルサレムに行き、主を礼拝したいと願うその
強い動機が書かれています。それは、自分の住んでいる地における苦しみです。その苦しみは、
平和への希求があるのに人々は偽りの言葉を話し、そして争います。メシエクは、イスラエルより
もはるか北にある所で、獰猛な騎馬民族がいるとされるところです。そしてケダルはアラビア北部
に位置して、遊牧民がいるところです。イシュマエルの子孫について、主は、「彼は野生のろばの
ような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼はすべての
兄弟に敵対して住もう。(創世 16:12)」と言われましたが、まさに兄弟に敵対するような人々でした。

「平和」という言葉、ヘブル語ではシャロームですが、これはとても奥深い、また幅広い意
味を持つ言葉です。122 篇に出てきますが、それは繁栄や栄えの意味合いを含む言葉でもありま
す。また、兄弟たちが一つになる、そうした交わりの豊かさの意味合いもあります。ここでは、神ご
自身との和解です。平和というのは、この天地を造られた神がおられ、その神の御心と一つになっ
ている被造物がある時のことです。神とその被造物が調和している状態です。ですから、この方を

自分たちの王とし、支配者として仰ぐことこそ私たちは、真の平和を得ることができます。だから、エルサレムに都上りして主を礼拝するのです。

しかし人は罪を犯して、神との平和が壊れてしまいました。けれども神はキリストにあって、世界と和解してくださったのです。「なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。(コロサイ 1:19-20)」したがって、私たちはキリストを宣べ伝えます。しかし、キリストは私たちの本当の姿を露わにされます。自分は普通の人間だと思っているところが、そうではないことを明らかにします。それで多くの人が争うのです。イエスを主とし、天地を造られた神を礼拝することこそが平和なのに、それを憎み、平和を語ると争いで返すのです。それは周囲の人々だけでなく、私たち自身の中にも、肉が霊に戦いを挑むことによって起こっています。そこにある苦しみと葛藤について、この詩篇の著者は、主に呼び求めているのです。

2A 山に向ける目 121

121 都上りの歌 121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。
121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。121:3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。121:4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。121:5 主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。121:6 昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。121:7 主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。121:8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

ここは午前礼拝で説教しました。今、散らされている所から都へ向かっているその途上での歌です。その時に彼はエルサレムにある山々を思い、そこから来る助けは、天地を造られた神からの助けであると悟ります。そこで、今、エルサレムに向かうその足を主が守ってくださり、また日常の出入りも災いから守ってくださり、実に永久までも自分を主の中で守ってくださると確信しました。

私たちの信仰生活も、天に向かうための旅と考えてよいでしょう。私たちは、このように集まります。それは、自分の助けは天地を造られた神から来ると悟る時です。そして、日常の生活が主によって守られることを知ります。

3A エルサレムの平和 122

そしてついに、都の中に入ってきました。

122 都上りの歌。ダビデによる 122:1 人々が私に、「さあ、主の家に行こう。」と言ったとき、私は喜んだ。122:2 エルサレムよ。私たちの足は、おまえの門のうちに立っている。122:3 エルサレム、

それは、よくまとめられた町として建てられている。122:4 そこに、多くの部族、主の部族が、上つて来る。イスラエルのあかしとして、主の御名に感謝するために。122:5 そこには、さばきの座、ダビデの家の王座があったからだ。

ここに著者の喜びの思いが書かれています。その理由は第一に、「主の家に行こう」というものです。エルサレムに行き、そこで何を楽しみにしているのか？主の家に行き、そこで主に目を上げて、主から憐れみを受けるためです。その期待感で喜んでいるのです。私たちが教会に来ている、その第一の目的は何よりも主への礼拝です。そこで会えるかもしれない友達ではありません。そこでしなければいけない奉仕ではありません。主の前に出ていきたいという熱心、喜びです。

そして第二に、主によって結び合わされている者たちと一緒にいることのできる、という期待です。それぞれ部族ごとに相続地に住んでいる者たちが、エルサレムに集まることで、まとめられます。エルサレムの町自体も、よくまとめられています。今の旧市街も、あの狭いところでユダヤ地区、キリスト教地区、ムスリム地区、そしてアルメニア地区が接しており、家々が所狭しと並んでおります。キリスト教徒の中で言えば、実に世界中から様々な言語で語り、また賛美しながらそこに集まってきました。このように、主にあって一つにまとまっている、結び合わされているということに、神の平和があるのです。

私たちが集まるのも、このキリストにある平和を持つためです。「ガラテヤ 3:28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」そして間もなく、私たちは一個教会だけでなく、同じカルバリーチャペルの群れが一堂に会します。まるで、各部族が一つのところに集まって主を礼拝するかのようです。

そして彼が喜びを抱く三つ目のことは、そこにダビデの王座があることです。さばきの座、ダビデの王座があることでなぜ喜ぶかと言いますと、それは主ご自身が彼を選び、彼の世継ぎの子によってご自分の国をとこしえに治めると約束されたからです。キリストが自分を裁かれる、あるいは統べ治められることを自分の喜びとし、楽しみとしているか？このことで神の平和を楽しみにしているかどうかを試されます。私たちの肉は、キリストの都合ではなく自分の都合を優先させようとします。そうすると、そこはメシエクやケダルのような争いが起こります。まとまりや結びつきではなく、ばらばら、各々、自分の目で正しいと思うことを行なうようになるのです。士師記の最後は、「21:25 イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」となっています。

122:6 エルサレムの平和のために祈れ。「おまえを愛する人々が栄えるように。122:7 おまえの城壁のうちには、平和があるように。おまえの宮殿のうちには、繁栄があるように。」122:8 私の兄弟、私の友人のために、さあ、私は言おう。「おまえのうちに平和があるように。」122:9 私たち

の神、主の家のために、私は、おまえの繁栄を求めよう。

有名な御言葉、「エルサレムの平和のために祈れ。」です。「エルサレム」という言葉が「神の平和」という意味を持っています。けれども、この町ほど戦禍の中にあつた所はありません。聖書時代ではバビロン捕囚、そしてローマによる世界離散がありました。エルサレムは単に山の上にあるだけでなく、瓦礫が重なってできあがったテル、遺跡の丘と書きまして「遺丘」と言いますが、瓦礫による丘になっています。つい最近まで、1967年の六日戦争までそこでは激しい戦闘が繰り広げられました。しかし、その現状はまさに私たち人間の姿そのものです。人は平和を望んでいますが、そうではなく争いを愛する自分がいます。神を第一とせず、神についての事柄に挑みかかる肉があります。それが共存している姿は、エルサレムを見ると目で見える形で分かります。

そして、なぜエルサレムの平和のために祈るのか？多くの人が疑問、いや批判もします。「なぜ、イスラエルやエルサレムばかりその祝福を願うのか。神は全ての人を愛しておられる。」そのとおりです、神は全ての人に祝福を与えたいと願われています。しかし、イスラエルを祝福することによって他のすべての国々に祝福しようとしているのです。イスラエルを愛することが、例えば、アラブ人を憎むことになりません。いいえ、イスラエルを祝福するからこそ、アラブ人に対する愛も与えられるのです。

主は初めにアブラハムを召されて、アブラハムに祝福の約束をされました。アブラハムに与えられたキリストの約束を信じる者は、全ての人祝福されます。このように神は選びを行われ、それを愛し、その選ばれた者によって祝福を与えたいと願われるのです。

神の愛は、選びの愛です。神は、第一にキリストを選ばれました。この選ばれた方を愛され、この方を愛するからこそ他の人々を愛することができます。キリストを第一にすることが他者をないがしろにするのではなく、むしろ他者を愛するためにもキリストを第一にするのです。そして次に、神は、キリストにあってご自分の子供にした者たちを愛しておられます。だから、神の家族を私たちは大事にします。互いに愛することによって、初めて自分の周りにいる人々にキリストの愛を分かち合う力が与えられます。そして次に、神によって造られた者たちすべてなのです、キリストは罪人のために死なれました。神は全ての人を愛しておられるのです。

そのことを考えながら、ここを読むと良く分かります。「おまえを愛する人々が栄えるように。」と祈っていますが、エルサレムは神がご自分の住まいとするために選ばれた場所であり、そこを愛するからこそ、その栄えが自分にも及ぶのです。「おまえの宮殿のうちには、繁栄があるように。」と祈っていますが、ダビデの宮殿が繁栄すれば、神に選ばれた王、正しい王が国を治めるのですから、その繁栄がそのまますべての人の豊かさにつながります。

そして兄弟や友人たちに、「おまえのうちに平和があるように。」と言っています。エルサレムを

愛しているからこそ、その平和が互いに与えられるのです。イエス様は甦られた後に、「平安があなたがたにありますように。」と弟子たちに言われましたが、確かに聖霊によって誕生した教会で弟子たちはすべてのものを分かち合い、互いに平和がありました。さらに、「私たちの神、主の家のために、私は、おまえの繁栄を求めよう。」とあります。これは逆方向です、あなたが繁栄するから、それが神、主の家のためになるのだということです。これは、私たちが栄えることで主の御名が高められるということもあるでしょうし、私たちに経済的な祝福も与えられることによって、神はご自分の捧げ物をより多く受け取るということもあるでしょう。

こうした全てのことを含めて、「エルサレムの平和のために祈れ」という命令があります。単に静かで争いがないということだけに限りません。神の選びにある祝福と豊かさを祈っているのです。

4A 憐れみを求める目 123

そしてついに、巡礼者は神殿の境内まで来ることができました。そして主を見上げています。

123 都上りの歌 123:1 あなたに向かって、私は目を上げます。天の御座に着いておられる方よ。123:2 ご覧ください。奴隷の目が主人の手に向けられ、女奴隷の目が女主人の手に向けられているように、私たちの目は私たちの神、主に向けられています。主が私たちをあわれまれるまで。123:3 私たちをあわれんでください。主よ。私たちをあわれんでください。私たちはさげすみで、もういっぱいです。123:4 私たちのたましいは、安逸をむさぼる者たちのあざけりと、高ぶる者たちのさげすみとで、もういっぱいです。

まず、「天の御座に着いておられる方よ。」と呼びかけています。神殿があり、そこに主がおられるからと言って、そこに神が収められているわけではありません。ソロモンが神殿を奉献する時、「それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。(1列王 8:27)」と祈りました。むしろ、神殿の中に入ることによって、天地を造られた神の御姿が明確になり、祈りもとめる場所は、神殿の中ではなく天の御座になるのです。

そして、一心に主に目を向けています。主人の手を奴隷が見るように、主を見ていると言っています。そこからだけ、真実な憐れみが注がれることを彼は知っているからです。私たちは、神以外のところに助けや慰めを求めてしまいましたが、午前礼拝で学んだようにそこには限界があります。主ご自身こそが私たちを憐れむことができます。

そして彼がなぜ憐れみを求めているのか？自分たちが迫害されている境遇があったからです。私たちが圧迫を受けていて、それからようやく解き放たれて安心すると、まず初めにすることは泣きだすことですね。同じようにして、彼は神に打ち明けています。ここで彼は、苦しみを受けていた者たちは、「安逸をむさぼる者」であると言っています。これは、主に絶えず目を向けていかなければ

ばいけないのと対照的に、何もしなくても平気でいられる状態です。「神なんかいない。神の助けなんか必要ない。」と思って、安穩と生きている状態です。私たちの敵は、明らかに反対する者ではなく、関心を示さない者です。「どっちでもいいんじゃない。」として、相手にしない態度です。それが、ラオデキヤにある教会に入り込んでいたので、イエス様は「わたしの口からあなたを吐き出そう。(黙示 3:16)」と唾棄されました。

5A 味方なる主 124

そうして祈りを捧げ、主のしてくださった救いについて、助けについて感謝します。

124 都上りの歌。ダビデによる 124:1 「もしも主が私たちの味方でなかったなら。」さあ、イスラエルは言え。124:2 「もしも主が私たちの味方でなかったなら、人々が私に逆らって立ち上がったとき、124:3 そのとき、彼らは私たちを生きたままのみこんだであろう。彼らの怒りが私たちに向かって燃え上がったとき、124:4 そのとき、大水は私たちを押し流し、流れは私たちを越えて行ったであろう。124:5 そのとき、荒れ狂う水は私たちを越えて行ったであろう。」

1 節はダビデによる掛け声で、2 節は民が応答しています。主が味方であったから、今、敵から救い出されて、生きているのだということです。「大水」という言葉は、ダニエル書 9 章にも出てきて軍隊を意味します。そして黙示録 12 章では、荒野に逃げた残りの民が、竜によって飲み込まれるときも「大水」で押し流そうとした、と書かれています(15 節)。ここも軍隊のことでしょう。イスラエルはそのような荒波をくぐって、なお生き残っている民族です。

キリスト者にも約束されていることです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ 8:31)」パウロが語っているのは、私たちを再び罪に定めようとする敵の存在です。困難や試練によって、私たちを何とかしてキリストにある神の愛から引き離そうとさせる力のことです。それに対して、「神が私たちの味方だ」と言っています。

124:6 ほむべきかな。主。主は私たちを彼らの齒のえじきにされなかった。124:7 私たちは仕掛けられたわなから鳥のように助け出された。わなは破られ、私たちは助け出された。124:8 私たちの助けは、天地を造られた主の御名にある。

かろうじて助かったということです。自分たちが逃げるのに必死ですが、その中ですり抜けることができます。今、引用したローマ 8 章の言葉を言ったパウロですが、殺されかけることが幾度となくありました。私たちのところにいらした、ある国からいらした宣教師の方もこの箇所を引用して、警察に捕まらずに済んだことを証しておられましたね。主が味方しておられるというのは、危機がないということではありません。しかし鳥が罠から助け出されるように、罠が破られるように助けられます。そして山を見て思った、助けが天地を造られた主から来ることを告白しています。

6A 取り囲まれる主 125

125 都上りの歌 125:1 主に信頼する人々はシオンの山のようだ。ゆるぐことなく、とこしえにながらえる。125:2 山々がエルサレムを取り囲むように、主は御民を今よりとこしえまでも囲まれる。

今、神殿から出て、シオンの山から周囲を眺めています。そこに見えるのは、山々です。シオンの山があります。ダビデの町であり元祖エルサレムです。その北には神殿の丘がありますが、それはモリヤ山です。そしてモリヤ山の東にはケデロンの谷を挟んでオリーブの山があります。オリーブの山の南には、ソロモンが偶像の宮を作ったつまずきの山があります。そしてシオンの山の南、ヒノムの谷を挟んで「悪巧みの山」というのがあります。祭司長たちがイエスを殺す計画を立て、イスカリオテのユダが彼を引き渡すことを企んだとされる山です。そして「ナビ・サムウィル」という山もあります。少なくとも七つの山があるのです。

このことを見て、詩篇の著者は、「主に信頼する人は、シオンの山のようだ。山々がエルサレムを取り囲んでいるように、主の民も囲まれる。」と歌ったのです。主ご自身の中にいればシオンの山やそれを取り囲む山々のように、主が自分を取り囲み、そして守ってくださいます。これはとこしえに続くもの、つまり永遠の保障が与えられます。

主を信頼するということは、実は難しいことです。イザヤ書の預言には、周囲の国々にまたユダの民自身に、「主はシオンの礎を据えられた。」と言って、シオンにこそ救いがあることを教えました(14:32)。ここに留まっていればよいのに、他のことをし始めてしまいます。ユダの民はエジプトやクシュに抛り頼んでしまいました。私たちが主を信頼するということに、どこまで留まれるかでその安全が保障されています。

125:3 悪杖が正しい者の地所の上にとどまることなく、正しい者が不正なことに、手を伸ばさなためである。125:4 主よ。善良な人々や心の直ぐな人々に、いつくしみを施してください。125:5 しかし、主は、曲がった道にそれる者どもを不法を行なう者どもとともに、連れ去られよう。イスラエルの上に平和があるように。

シオンの山そのものが、安全を保障しているわけではありません。シオンに住まいを持っておられる神の中に留まっているから守られます。したがって、エルサレムにおいて不義を行なっていれば、神は容赦なくその宮も、またその町も破壊されるのです。それがバビロン捕囚、またローマによる世界離散で成就しました。私たちがキリストの内に留まっているからこそ、永遠の救いの保障が与えられています。キリストの内にこそ救いがあるのであり、そこから離れたら焼き尽くす火しかありません。

7A シオン帰還の喜び 126

126 都上りの歌 126:1 主がシオンの捕われ人を帰されたとき、私たちは夢を見ている者のようで

あった。126:2 そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。そのとき、国々の間で、人々は言った。「主は彼らのために大いなることをなされた。」126:3 主は私たちのために大いなることをなされ、私たちは喜んだ。

ユダヤ人がバビロン捕囚からのエルサレム帰還を果たした時の歌になっています。その喜びを言い表しています。七十年の捕囚の後に、ペルシヤのクロス王がエルサレム帰還の布告を出しました。ペルシヤの全国に生きているユダヤ人たちは、その知らせを聞いて、夢を見ているようだったのです。そして、彼らが笑っています。あまりにもうれしい話であり、信じられないような話なので、笑うほどだったのです。ちょうど、イサクという名が「笑う」を意味しているように、笑ってしまうほど、神の働きが大いなるもので、すばらしかったのです。ところで、新改訳の第三版は「繁栄を元どおりにする」という訳があると思います、そこは本来「捕らわれ人を帰す」と訳すべきところです。

126:4 主よ。ネゲブの流れのように、私たちの捕われ人を帰らせてください。126:5 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。126:6 種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。

バビロンから解放されたけれども、エルサレムに帰還することを決めたユダヤ人は五万人程度でありました。これは当時のユダヤ人人口のパーセントを少し越えるぐらいだったのではないかと考えられています。ほとんどの人がバビロンの生活に定住していて、そこから離れたくなかったのです。ちょうど今、イスラエルの国ができたけれども世界中にユダヤ人がまだ離散しているのと同じです。そこで、自分たちは戻ってきたけれども、捕らわれ人を帰らせてくださいと祈っています。

ネゲブはイスラエル南部の乾燥地帯です。そこには、ワジと呼ばれる涸れ川が走っています。いつもは何の水もありません、雨季である冬に年に一・二度の雨が降ります。その時の水は鉄砲水です。渴ききったところに、一気に水が押し寄せるのです。同じようにして捕らわれの民を帰らせてくださいと祈っています。

そして、涙と共に種を蒔く、また泣きながら出て行った者たちという表現が出てきます。これは、捕えられていった悲しみのことを話しています。しかし、その受けた悲しみの涙を拭いて十分にあり余る喜びがあるという意味です。罪を犯したけれども、それによって痛みを受けたけれども、それを慰めてあまりある罪の赦しがあります。「イザヤ書 40:1-2 「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」そしてローマ人への手紙にも、この恵みの原則はあります。「ローマ 5:20 律法がはいつて来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。」

そして罪を赦すという報いだけでなく、私たちは信仰によって行った良い行いも、報いがあること

を主は約束してくださいました。「ヘブル 6:10 神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」涙を持って労苦したら、必ず喜びの慰めがあります。

8A 主の建てられる家 127

127 都上りの歌。ソロモンによる 127:1 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。127:2 あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなし。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。

時は、恐らくはバビロンからエルサレムに帰還して、神殿と町を再建しているユダヤ人たちのことであろうと思われます。ダビデの後継者としてソロモンは神殿を建築し、彼がその時のことを書いたのかもしれませんが、126 篇には捕らわれ人が帰ってきた話があり、それで主の家と、エルサレムの町の話をしているので、帰還後のユダヤ人が歌うことができるようにしているのではないかと思います。ですから思い出せる時代は、エズラ記とネヘミヤ記です。エズラ記において神殿を再建し、ネヘミヤ記においてネヘミヤが総督として指揮を取って、城壁を再建させました。帰還民は人数が少なく、エルサレムの城壁の中に住む者たちはとても少なく、家屋もまばらでした(ネヘミヤ 7:4)。周囲の敵に囲まれていたので、それぞれの家から見張りを出して、またそれぞれの見張り所にも誰かを置かなければいけませんでした(3 節)。

そこで次のことを覚えているのが必要でした。「どんなに人が努力しても、主の祝福に付け加えることができないのだ。」ということです。これは都上りの詩篇の共通したテーマです。「私の助けは、天地を造られた主から来る。」とありました。自分で自分を助けることはできず、主が助けてくださいます。「私たちの目は私たちの神、主に向けられています。主が私たちをあわれまれるまで。(123:2)」とありました。主が憐れまれるとお決めにならなければ、憐れみを受けることはありません。それを分かっているのです。一心に主を見つめているのです。そして先になります。130 篇 4 節に、「あなたが赦してくださいからこそ、あなたは人に恐れられます。」とあります。自分で何かをしたから赦されるのではなく、主が専ら憐れむから、罪赦されるのです。ですから、主が私のためにしてくださいることを、熱心に待ち望むのです。そこで、主が自分に働きかけてくださるのです。パウロが言いました。「ローマ 9:16 したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」

しかし私たちは、自分の働きで主のなされることを成し遂げようとしてしまいます。主がなされることを待つことなくして、自分たちで主ご自身の何かを作ろうとします。そして何かができるでしょう。しかし、それは主のものではないので虚しいのです。主がしてくださいるからこそ、そこに命があります。そこに神の恵みと憐れみが満ちています。例えば、私たちの教会に誰か資本家が二億円、資金提供すると言ったら私は受け取るべきでしょうか？そして、すばらしい教会堂を都心部に建てた

としたらどうでしょうか？人の素晴らしい捧げ物であったとしても、主がしてくださったと、その御名をほめたたえることができなければ、それは虚しいのです。どんな小さな事であっても、確かにそれは主がしてくださったのだと認めることができるものが、積み上げられていくことを願います。

127:3 見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。127:4 若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ。127:5 幸いなことよ。矢筒をその矢で満たしている人は。彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。

エルサレムの町に住んでいる人々が少なく、そしてその少ない人数で町を敵から守らなければいけないという背景を考えれば、このつながりが分かります。子供を主が与えてくださり、その子たちがこの町の将来の繁栄と安全を決定づけます。それをしてくださるのも主ご自身であり、子孫は主からの賜物です。主の教会も同じです。私たちは、霊的な誕生のある共同体であることを主に願います。霊の子孫が生まれてくることを望みます。ここが、霊の誕生のない、ただ形だけを守る家ではなくて、敵に対して勝ち誇る、生命を生み出す場所であることを祈ります。

9A 家族の祝福 128

128 篇は 127 篇の続きで、家族の祝福が書かれています。

128 都上りの歌 128:1 幸いなことよ。すべて主を恐れ、主の道を歩む者は。128:2 あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。128:3 あなたの妻は、あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のように。あなたの子らは、あなたの食卓を囲んで、オリブの木を囲む若木のように。128:4 見よ。主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける。128:5 主はシオンからあなたを祝福される。あなたは、いのちの日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。128:6 あなたの子らの子たちを見よ。イスラエルの上に平和があるように。

主を恐れる者に、確かに勤労や家族の祝福が約束されています。そして、子孫がいるからこそその神の祝福であり、イスラエルへの平和であります。アブラハムに約束された「星の数のような、海の砂のようなイスラエルの子孫」であります。私たちは肉においても、霊においても、このような信仰の家族が必要です。肉においては、信仰を継承する家庭が築かれていることを、主は望まれています。キリストを第一とする夫婦関係、そして親子関係。それから、霊においては神の家族における信仰の養いが必要です。私たちがどこまで、霊的真実をこの共同体で具体化させているでしょうか。神の家族としての結びつき、兄弟姉妹としての愛、これがあってこそその祝福であり、平和であります。

10A シオンを憎む者 129

129 都上りの歌 129:1 「彼らは私の若いころからひどく私を苦しめた。」さあ、イスラエルは言え。129:2 「彼らは私の若いころからひどく私を苦しめた。彼らは私に勝てなかった。129:3 耕す者は

私の背に鋤をあて、長いあぜを作った。」129:4 主は、正しくあり、悪者の綱を断ち切られた。129:5 シオンを憎む者はみな、恥を受けて、退け。129:6 彼らは伸びないうちに枯れる屋根の草のようになれ。129:7刈り取る者は、そんなものを、つかみはしない。たばねる者も、かかえはしない。129:8 通りがかりの人も、「主の祝福があなたがたにあるように。主の名によってあなたがたを祝福します。」とは言わない。

ここは、昔からの敵がシオンの中に入り込んできた時に、それを激しく嫌悪して追い出す姿であります。これは、ネヘミヤ記の最後に見ることができます。城壁を再建する時に、その工事を阻止するのに先頭に立った、アモン人トビヤが、なんと神の宮の庭にある一室があてがわれていたのです。なんでそんなことが起こったのか？大祭司エルヤシブがトビヤと仲良くしていたからです。また、もう一人の敵、サヌバラテの娘とエルヤシブの息子が結婚もしていました。そこでネヘミヤは祭司職を汚したこれらの者たちを追い出しました。

私たちは時に、このような戦いをしなければいけません。古くからの敵、もう勝利したはずの罪が再び自分の生活の中、あるいは自分たちの交わりの中に入ってきます。それが戻ってきます。そこで毅然とした態度で、その悪を取り除かねばなりません。

11A 深い淵にいるイスラエル 130

130 都上りの歌 130:1 主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。130:2 主よ。私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。130:3 主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。130:4 しかし、あなたが赦して下さるからこそあなたは人に恐れられます。

都上りの歌は、神殿礼拝が回復してしばらくしてからのことを歌っています。神殿礼拝が始まっても、その後で人々は今、見たように早くからその生活から離れていきました。人々は捧げ物を怠るようになり、そのためにレビ人が、生活ができなくなり自分の町に帰ってしまったというようなことも起こりました。安息日に商売をする者たちもいました。そして異邦人との結婚をしている者たちもいました。これが、ネヘミヤ記の描いていることです。そしてその後しばらくしてマラキ書において、祭司たちが嫌々ながらいけにえを捧げている姿を見ます。最上のいけにえではなく、欠陥のある牛を捧げていました。さらに祭司はその妻と別れて、異邦人を結婚しました。したがって、ここでは神殿礼拝に献身していたところが、人間の全面的な墮落によって元に戻ってしまった様子を描いています。

「深い淵から、私はあなたを呼び求めます。」と言っています。ちょっとした穴に落ちたのではありません。自分で這い上がることはできません。もっぱら主が引き上げることによってのみ、出ることができます。そして主が不義に目を留めようものなら、いつでも滅んでもおかしくありません。もっぱら主の憐れみによって、自分の罪が赦されることを彼は知っていました。宗教改革者、信仰によ

る義認についてパウロのローマ書から悟ったルターは、この詩篇を他のいくつかの詩篇と共に、「パウロ詩篇」と呼びました。人は自分の善行で正しくは決してなれない、全的に墮落しているのだということです。

そこからの回復は、主が赦して下さることです。主が慈しみを注がれることによって初めて、その人は主を恐れることができます。「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導く(ローマ 2:4)」とパウロは言いました。主が罪を赦し、その心を新しくして下さるからこそ、主を恐れ、愛することができます。それはイエス様の足を涙で濡らし、油で塗ったあの不道德の女のしたことでもあります。多く愛したのは、多く愛されたから、罪赦されたからです。

130:5 私は主を待ち望みます。私のたましいは、待ち望みます。私は主のみことばを待ちます。
130:6 私のたましいは、夜回りが夜明けを待つのにまさり、まことに、夜回りが夜明けを待つのにまさって、主を待ちます。130:7 イスラエルよ。主を待て。主には恵みがあり、豊かな贖いがある。
130:8 主は、すべての不義からイスラエルを贖い出される。

詩篇の著者は、イスラエルの贖いを待っています。今は夜で、夜回りが夜明けを待つように主を今か今かと待っています。そして主には恵みがあり、豊かな贖いがあると信じています。これはまさに、主イエスの現われを待っているかのようです。イザヤは、メシヤが現われるのはガリラヤであると預言しましたが、「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。(9:2)」と証言しました。イエスにあって、この預言が成就しました。この方が行われたその御業のために、人々に恵みが訪れ、豊かな贖いがあったのです。主がお生まれになり、その幼子をヨセフとマリヤがエルサレムに連れていったとき、シモンは「私の目があなたの御救いを見たからです。(ルカ 2:30)」と言いました。

私たちは、既に来られたイエスを信じて、すべての不義を赦していただくという豊かな贖いに預かりました。しかし、それでも私たちも同じように暗闇を通ります。自分ではどうしようもないと思われる絶望を味わいます。パウロは、神の恵みによって救われたこと、罪の支配から解放されたことを教えたにも関わらず、ローマ 7 章で自分の体に働く、罪の原理から抜け出せないでいました。そして、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。(24 節)」と嘆きました。しかし彼は解放されます。自分にはどうしようもできないことを知って、それで「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」と祈れたのです。自分ではなく、自分の内におられるキリストが罪の罰を受けてくださったことを知り、それで御霊の働きによって肉の行いを殺すことができました。

12A 深入りしない信仰 131

そして 131 篇もまた、「主を待て」という勧めで終わります。

131 都上りの歌。ダビデによる 131:1 主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。131:2 まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のよう
に御前におります。131:3 イスラエルよ。今よりとこしえまで主を待て。

イスラエルの民は、暗闇の中で主を待っている中で、一体、自分の身に起こっていることは何なのかを知りたいと願ったと思います。彼らの通っている歴史は、彼らを虐げる異邦人の諸国の思惑がたくさんあります。ダニエル書 11 章には、ギリシヤの王たちの攻略と策略が描かれています。その中で思慮深い者たちだけが、主に対して忠実です。

ですから、その心は何か大きなことが起こっていることを感じ、それでそれを詮索してみたいと思います。しかし、それを知らないことは決めました。まるで乳飲み子のように、悪の企みに対して疎くあろうとしたのです。パウロがローマにある教会の人々に、「私は、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあってほしい、と望んでいます。(ローマ 16:19)」と言いましたが、ちょうどそのようにしました。そして、主のしてくださることに集中していたのです。自分は理解できなくとも、すべては主が行っておられることを信じて、それで主が今、語られていることに集中していたのです。

これを書いたのはダビデですが、彼の特徴は直ぐな心でした。若い時からイスラエルの中枢にいましたが、彼の心は誇りませんでした。人間的な思惑や策略があります。しかし、そういったものをダビデは拒みました。彼は少年、羊飼いであったのと同じ心で王としての統治を行ないました。そのようなへりくだった態度で、主の前にいます。

私たちキリスト者も、終わりの日が近づくとつれて信仰を持って生きるのが困難になっています。どうして、こんなことが起こっているのだらうと、何か大きなことが背後で動いているかのように見えます。それで多くの人がある秘密を探ろうとして、果てしのない議論の中に陥っています。しかし、それは私たちの取るべき態度ではありません。耐え忍ぶのです。御霊も、どうやって祈ればよいか分からないという弱さを良く知っておられて、言いようもないうめきをもって私たちのために執り成してくださっています(ローマ 8:26)。私たちは、キリストにあつて心と思いを愚かにします。理解できなくとも、主が命じられているという理由だけで、それを実践するのです。